

日英新聞記事における第1段落の機能

- 対照修辞論に関する一考察 -

勝田順子

要 旨

言語や談話のジャンルの違いにより、レトリック形式に違いがあることが指摘されてきている。本稿においては、言語間におけるレトリック対照を、日英新聞（「朝日新聞」と“The Guardian”）のニュース記事をデータとし、特に、記事の「第1段落の機能」に注目して行った。「第1段落の機能」について、1）記事の主題はどこで初めて述べられるか、2）第1段落は「主題」及び「第2段落以降の内容」をどの程度含むか、3）第1段落の内容の詳細分析の3点から考察した。その結果、「朝日新聞」の第1段落は「記事の主題及び第2段落以降の内容」を多く含み、記事全体の総論を与えるという役割を持っているのに対し、“The Guardian”の第1段落は「記事の主題(又はその一部)」を提示するにとどまることが多く、よって、記事の主題を大きく押し出すという役割を持っていること、また、「朝日新聞」にはない、「物語的書き出し」や「比喩を用いた抽象的表現」といった読者を引きつける方法も取られていることが明らかになった。

キーワード：対照修辞論 新聞記事 日英対照 第1段落 記事の主題

1. はじめに

言語の違いや談話のジャンルの違いによって、レトリック形式に違いがあることが、これまで国内外の研究者により証明されてきている。Kaplan (1966) は、アメリカで英語を学ぶ各国留學生が書いた英語の作文を比較した結果、文章のレトリック展開は、それぞれの言語によって異なっているとし、5つのパターンに分類した。また、Hinds (1983) は、朝日新聞の「天声人語」を分析し、日本語のレトリックは、英語のレトリックと異なり、「起承転結」という書き方が日本では認められているとする。これらの論文は、言語間においてレトリックの違いがあることを示したものと見える。一方、永野 (1983) は、テレビ番組「テレビコラム」を、どこでテーマが述べられるかという点から分析し、書き言葉と違い、テーマは全て冒頭で示されることが多いとしている。これは、Kaplan、Hinds が、言語間のレトリックの違いを示したのに対し、同言語においても、その談話のタイプにより、異なったレトリックを持つ可能性があることを示している。

本論文は、上述した言語間におけるレトリックの対照を、日本語と英語の新聞のニュース記事をデータとして行おうとするものである。異言語間の新聞記事の構成は異なっている可能性がある。よって、日英両新聞記事の記事構成が異なる可能性があると考え、ここでは特に、記事の「第1段落」の持つ機能に注目し、両新聞で使われるレトリックの違いの一端を明らかにしようとするものである。

2. 分析対象

日本語については「朝日新聞」を、英語については“The Guardian”を調査対象として選んだ。“The Guardian”は、イギリスの日刊紙で、高級紙として、知識層に広く読まれている。両新聞の1999年8月から9月末日までのニュース記事の中で、「東ティモールの独立選挙」を扱った記事の中から、各30記事づつをとりだし、調査の対象とした。日英の新聞記事において、異なる記事を比べたのでは、異なった構成を持っていたとしても、それが日英の記事構成の違いによるものなのか、記事内容の違いによるものなのか断定することは難しい。そこで、日英両新聞が、比較的長期間にわたって取り上げていた「東ティモールの独立選挙」という同内容の記事を比較することにした。

調査の対象とした日英各30記事は、インドネシアの東ティモールという地域で、インドネシアからの独立か残留かを問う住民選挙が行われる前夜の町や住民の様子、投票結果、独立派勝利による残留派民兵の暴動、その暴動の拡大、東ティモール民の脱出、避難、平和維持軍派遣についての各国の討議、平和維持軍派遣へ、と続く一連の東ティモールで起こった出来事を扱っている。

3. 分析方法

この論文では、両記事の「第1段落」の機能について次の点から比較してみたい。1) 記事の主題はどこで初めて述べられるか、2) 第1段落が主題及び第2段落以降の内容をどの程度含むか、3) 第1段落の内容の詳細分析、についてである。また、1)～3)の点において違いがあるとすれば、それは何に起因するものであるのかを考えたい。

3.1. 記事の主題はどこで初めて述べられるか

新聞のニュース記事の主題は、記事全体の中で、どのあたりで初めて述べられるのかについて、以下の調査を行った。記事の主題が何であるかの判断基準には、「見出し（大見出し及び小見出し）を含むかどうか」を用いた¹⁾。これは、新聞のニュース記事の見出しには、短時間でその記事内容がわかるように、その記事で最も伝えたいこと、つまり、主題が表されているはずだと考えるからである。

例えば、9月3日の“The Guardian”の記事の見出しは“Pressure on Indonesia stepped up”（インドネシアへの圧力拡大す）であるが、記事本文の第1段落に“- but international pressure grew for the Indonesians to maintain order themselves”（しかし、国際的圧力は、インドネシア政府が自力で秩序を維持するのを求める方に大きくなった。）とあり、この記事の主題は、第1段落で述べられているといえる。以下に、調査結果を示す。

- (A) 主題の全ての内容が第1段落で現れる
- (B) 主題の一部の内容が第1段落で現れる
- (C) 主題の内容が第1段落で全く現れない

表1 新聞記事の第1段落における主題の出現頻度

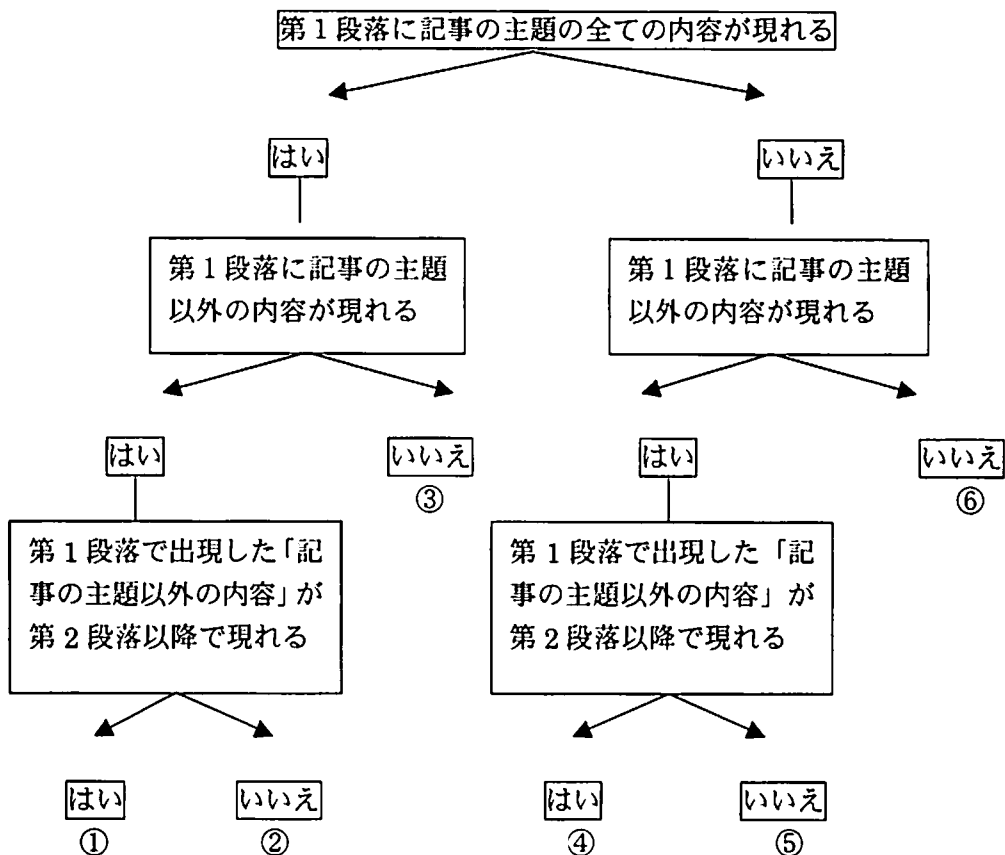
	(A)	(B)	(C)	計
朝日新聞	25 (83%)	5 (17%)	0 (0%)	30
The Guardian	13 (43%)	12 (40%)	5 (17%)	30

上記の結果より、(A)「主題の全ての内容が第1段落で現れる」記事数は、各30記事中、「朝日新聞」が25記事(83%)、「The Guardian」が13記事(43%)となり、「朝日新聞」の方が「The Guardian」に比べて、主題の第1段落における出現率がかなり高いことがわかる。つまり、「朝日新聞」では第1段落を読めば、80%以上の確率で、その記事の主題が全てわかるのに対して、「The Guardian」の場合には、第1段落を読んだだけでは、記事の主題全てをつかむ可能性は低いといえる(約40%の確率で、その記事の主題が全てわかる)。

3.2. 記事の第1段落が「主題」及び「第2段落以降の内容」をどの程度含むか

3.1.の結果から、両新聞における第1段落の持つ機能は異なっていることが予想されるため、第1段落を、「記事の主題を含むか」「記事の第2段落以降の内容を含むか」という2点に注目して、図1の①～⑥の6タイプに更に詳しく分けて考察した。

図1 「第1段落が『記事の主題』『第2段落以降の内容』を含むか」という点からみた新聞記事の詳細分類



「朝日新聞」と“The Guardian”における図1の①～⑥の各記事数は以下の通りである。

表2 新聞記事の①～⑥のタイプ別頻度

	①	②	③	④	⑤	⑥	計
朝日新聞	17 (57%)	4 (13%)	4 (13%)	1 (3%)	4 (13%)	0 (0%)	30
The Guardian	3 (10%)	0 (0%)	10 (33%)	6 (20%)	4 (13%)	7 (23%)	30

上記の結果より、「朝日新聞」においては、①のタイプが多くを占めていることがわかる。つまり、「朝日新聞」では、記事の第1段落は、①「記事の主題を全て含み、かつ、第2段落以降で現れる内容も含んでいる」ということである。これに対して、“The Guardian”では、③「第1段落に、記事の主題が全て現れ、それ以外の内容は現れない」というタイプが多い。次に多いのは、⑥「第1段落に記事の主題の内容の一部が現れ、それ以外の内容は現れない」というものである。

以上を、3.1.の結果と考え合わせると、「朝日新聞」の場合は、第1段落に記事の主題を含むものが多く、かつ、第2段落以降の内容を多く含むと言えそうである。一方、“The Guardian”は、第1段落に記事の主題を含むものは、「朝日新聞」と比べるとかなり少ない。また、第1段落で主題を含んでいるものも、それ以外の内容を含むことは少ないと言えそうである。

そこで、以上の予測を実証するために、①～⑥の各タイプの記事において、「第1段落が、第2段落以降の段落の内容を含む割合の平均」を調べたところ、以下のようになった。なお、この割合を出すにあたっては、行数を基準にした。つまり、表の数値は、(第2段落以降の全行数のうち、第1段落をパラフレーズした内容を含む行数) ÷ (第2段落以降の全行数) × 100 を計算して求められたものである。

表3 新聞記事の第1段落が「第2段落以降の段落の内容」を含む割合のタイプ別平均

	①	②	③	④	⑤	⑥	平均
朝日新聞	57.0%	70.3%	19.0%	47.3%	19.2%	-	48.4%
The Guardian	33.6%	-	14.0%	32.5%	13.6%	26.0%	22.4%

上記の結果より、「朝日新聞」の記事の第1段落の内容は、第2段落以降の内容を平均48.4%含み、“The Guardian”のほうは、平均22.4%含んでいるということがわかる。つまり、「朝日新聞」の場合は、第1段落を読めば、記事全体の約半分の内容がわかるが、“The Guardian”のほうは、記事全体の約4分の1がわかる程度であるということである。

3.1.及び3.2.の結果より、「朝日新聞」では、第1段落は、記事の主題の多くを含み、かつ、記事全体の内容も平均して、半分程度含んでおり、第1段落を読めば、記事の内容について、かなりの情報を得ることができるといえるだろう。

これに対し、“The Guardian”のほうは、第1段落は、記事の主題を全て含むことは朝日新聞に比べてかなり少なく、また、第1段落からは、記事全体の内容がわずかにわかるにとどまっている。

この違いは、両新聞の第1段落の持つ機能の違いからくるものと考えられる。「朝日新聞」では、第1段落は記事全体の総論的役割を果たし、読者に記事全体の概略を与えるという機能を持っていると推測される。これは、短時間で、記事全体の概略をとらえられるという利点がある一方、あまりにも多くの情報を第1段落に含むため、記事の内容に対して焦点が定まりにくい、また、何を最も伝えたいのかわかりにくいという点もあるのではないかと考える。これに対し、“The Guardian”では、記事の主題(またはその一部)を提示するにとどまる事が多く、記事の主題を、押し出した形になっており、読者に記事の主題をはっきりわからせるという機能を持っている。これは、読者に与えるインパクトが強い一方、それ以外の記事内容については、第2段落以降を読み進めなければならない。

3.3. 第1段落の内容の詳細比較

ここでは、第1段落の内容について更に詳しく分析をしたところ、以下(I)～(III)の7つのカテゴリーに分けられた。

(I) - 1 主題の全てまたは一部をより詳しく述べたもので、第1段落の文章の修飾節をなくせば、主題に還元できるもの。

(1)【主題】

①国軍、民兵抑え込めるか (大見出し)

②東ティモール 投票終了 / ③再衝突の恐れ消えず (小見出し)

【第1段落】

②独立かインドネシア残留かを問う三十日の住民投票を乗り切ったことで、③東ティモール情勢の焦点は、投票結果が判明した後の治安維持に移った。住民投票で残留が決まれば、大きな混乱はないだろう。だが、独立と決まった場合、独立、残留両派の衝突が起きる恐れは十分ある。

①それを防げるかどうかは、両派の和解がどこまで進むかに加え、インドネシア国軍が残留派民兵組織の暴走を押さえ込めるかどうかにかかっている。 (「朝日新聞」8月31日)

下線部①～③はそれぞれ、主題の①～③をより詳しく述べたものである。例えば、主題①「国軍、民兵抑え込めるか」は、第1段落では「それ(=衝突)を防

げるかどうかは、両派の和解がどこまで進むかに加え、インドネシア国軍が残留派民兵組織の暴徒を押さえ込めるか」とあり、「両派の和解がどこまで進むかに加え」「インドネシア」「残留派」「組織」「暴徒」などの修飾部をなくせば、主題へ還元できる。

(I) - 2 (I) - 1 の内容を含み、かつ、第 2 段落以降の内容以外の内容を含むもの

(2) 【主題】

残留派、独立派襲う（大見出し）

東ティモール 発砲、4 人が死亡（小見出し）

【第 1 段落】

住民投票への街頭運動が最終盤に入っている東ティモールの中心都市ディリで二十六日、残留派の民兵が独立派の事務所など数力所を襲撃し発砲や投石をし、両派の衝突に発展した。目撃情報などによると、少なくとも四人が死亡、双方に多数の負傷者が出た。ディリでは六月に国連東ティモール支援団（UNAMET）が展開してから最悪の事態となった。

（「朝日新聞」8月27日）

下線部は「主題をより詳しく述べたところ」である。また、網掛け部は主題及び第 2 段落以降には現れない内容であり、「残留派の独立派への襲撃」という事件に対して、「最悪の事態」という「意義付け」をしていると言える。

(I) - 3 (I) - 1 の内容を含み、かつ、第 2 段落以降の内容を要約した内容を含むもの

(3) 【主題】

①Pressure on Indonesia stepped up

（インドネシアへの圧力拡大す）

【第 1 段落】

2・3Indonesia yesterday signalled it might allow international peacekeepers into East Timor if the result of Monday's referendum follows predictions and goes in favour of independence -

①・7・10but international pressure grew for the Indonesians to maintain order themselves. （“The Guardian” 9月3日）

(インドネシア政府は、昨日、もし月曜日の投票結果が予想通り独立賛成多数であれば、国際平和維持軍を東ティモールに派遣するのを許可する可能性があることを知らせた。しかし、国際的圧力は、インドネシア政府が自力で秩序を維持するのを求める方に大きくなった。)

下線部①は、主題①を詳しく述べたものであり、また、下線部2・3及び7・10は、それぞれ、第2・3及び第7・10段落の内容の要約である。

(I) - 4 (I) - 3の内容を含み、かつ、第2段落以降の内容以外の内容を含むもの(つまり、(I) - 2と(I) - 3の両要素を含むもの)

(4)【主題】

①東ティモール独立へ (大見出し)

②住民投票 独立派、78%獲得 / ③残留派の抵抗懸念 (小見出し)

【第1段落】

②一九七六年にインドネシアが武力併合した東ティモールの独立か、残留かを問うため国連管理下で八月三十日に実施された住民投票で、国連は四日、「自治案拒否」(独立)三四四、五八〇票、「受け入れ」(残留)九四、三八八票の開票結果を発表した。独立派が七八・五%の得票で大勝した。④東ティモールは、国連の三十五年間の暫定統治期間をへて独立国になる見通しとなった。国連主催で住民みずからが独立か否かを決める直接投票は前例がなく、民族自決の新しい方向性を示すことになりそうだ。⑤だが、残留派は、国連が独立派寄りで公正な投票が行われなかったと反発している。⑥投票結果を拒否して独立派や国連への攻撃を強めており、⑦国連暫定統治が始まるまでの「力の空白」が懸念されている。 (「朝日新聞」9月4日夕刊)

下線部①～③はそれぞれ、主題①～③をより詳しく述べたものである。下線部4、6、8は、第4、6、8の各段落の内容の要約を含むものである。また、網掛け部は主題及び第2段落以降に現れない内容であり、「東ティモールの独立住民投票は前例がなく、民族自決の新しい方向性を示すことになりそうだ」という、「意義付け」及び「将来予測」をしている。

(II) - 1 主題の内容を含まず、第2段落以降の段落の総論的な役割を果たしているもの。

(5) 【主題】

Chinese would veto peace force for East Timor (見出し)

(中国、東ティモールへの平和維持軍派遣拒否の見こみ)

【第1段落】

A desperate effort has been launched to persuade Jakarta to accept some form of international intervention in East Timor, where it is feared that a week of killings since Monday's independence vote in the Indonesian territory could swell into massacres.

(“The Guardian” 9月6日)

(東ティモールへの何らかの国際介入をインドネシア政府に受け入れさせるための必死の努力がなされている。その東ティモールで、月曜日の独立選挙以来1週間におこった殺人は、大虐殺にまで発展するおそれがあると懸念されている。)

第1段落は、主題を詳しく述べたものではないが、「必死の努力がなされている」の具体的な内容が、第2～9段落に述べられており、第2～9段落の総論の役割を果たしている。

- (II) - 2 主題の内容を含まず、第2段落以降の段落の、意味上のまとまりを持つ最初の段落と考えられるもので、物語の出だしの印象を与えるもの

(6) 【主題】

Herded, shifted and cut off (大見出し)

(集められ、移動させられ、そして孤立させられる)

Refugees: West Timor camps mean virtual imprisonment (小見出し)

(避難民：西ティモールキャンプは事実上の投獄を意味する)

【第1段落】

When Sister Margaret arrived in Kupang yesterday after a 30-minute flight from East Timor's capital Dili, she suddenly realised how lucky she was to be a nun. (“The Guardian” 9月10日)

(シスター・マーガレットが昨日、東ティモールの首都ディリから30分間飛行機に乗り、クパンに到着したとき、突然、自分が修道女であることがいかに幸運であるかを実感した。)

(Ⅲ) 抽象的な内容のもの（主題を詳しく述べたものではなく、主題を含み、それよりも広範な内容を抽象的に述べているもの）

(7) 【主題】

Plenty of promises, no action (大見出し)

(多くの約束、実行なし)

The delays: Bureaucratic wrangling snuffs out glimmer of hope

(小見出し) (遅延：官僚の論争がかすかな望みの光を消す)

【第1段落】

Gloom has returned to Jakarta after the glimmer of hope at the weekend when President BJ Habibie invited a UN peacekeeping force to enter East Timor, and then agreed to an emergency programme of humanitarian aid. ("The Guardian" 9月15日)

(ハビビ大統領が、東ティモールに国連平和維持軍を要請し、また、人道援助緊急計画に同意した週末に、かすかな希望の光がさしこんだが、その後、再び暗影がインドネシアにかかってきている。)

両記事それぞれに、(Ⅰ)～(Ⅲ)の占める割合は以下の表の通りである。

表4 新聞記事の(Ⅰ)～(Ⅲ)のタイプ別頻度

	(Ⅰ)-1	(Ⅰ)-2	(Ⅰ)-3	(Ⅰ)-4	(Ⅱ)-1	(Ⅱ)-2	(Ⅲ)	計
朝日新聞	4 (13%)	6 (20%)	11 (37%)	9 (30%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	30
The Guardian	17 (57%)	0 (0%)	5 (17%)	0 (0%)	2 (7%)	3 (10%)	3 (10%)	30

「朝日新聞」の第1段落は全て、(Ⅰ)-1～(Ⅰ)-4の中のいずれかのカテゴリーに含まれ、「主題についてより詳しく述べたもの」である。また、「第2段落以降の内容を要約した内容」を含んでいるものが多い。それに対して、“The Guardian”の第1段落には、(Ⅰ)-1「主題の全てまたは一部をより詳しく述

べたもの」が多く、他の内容は含まないものが多い。しかしながら、それ以外の内容のものも約 27% 見られた。(Ⅱ) - 2 では、第 1 段落に、これから何か物語が始まるかのような書き出しで、これは読者の興味を引きつけるという効果がある。また、(Ⅲ) では、比喩を使い、抽象的表現をすることで、読者の興味を引きつける効果があると考えられる。

3. 1. から 3. 3. より、「朝日新聞」では、第 1 段落の役割は、記事全体の総論的な内容を与えることであり、よって、その内容も、(Ⅰ) - 1 ~ (Ⅰ) - 4 「主題についてより詳しく述べたもの」「第 2 段落以降の内容を要約した内容」であることが多く、第 1 段落の内容から、修飾部を取り除けば、主題に還元できるものばかりであるといえる。一方、“The Guardian” は、(Ⅰ) - 1 が多く (約 57%) を占めるが、それ以外にも、(Ⅱ) - 2、(Ⅲ) のような読者の興味を引きつけるという手法も使われている (20%) ことがわかる。

4. まとめ

これまで、日英両記事の第 1 段落の機能について、「記事の主題はどこで初めて述べられるか」「主題及び第 2 段落以降の内容をどの程度含むか」「内容の詳細分析」という点から、考察してきた。その結果、両記事における第 1 段落の役割は著しく異なっているということが明らかになった。「朝日新聞」の第 1 段落は、「記事全体の総論を与える」、「The Guardian」は「主題を大きく押し出す」という役割をそれぞれ持っていると考えられる。また、“The Guardian” は、時には、第 1 段落に「物語的な書き出し」、及び、「比喩を用いた抽象的表現」を用い、読者を引きつけるという手法も取られていることがわかった。

この違いの要因の一つには、両国の新聞記事というものが持つ文化的な性質の違いが背景にあると考えられる。Nishihara, S and Shibahara, T (1998) では、日本の新聞社は不偏不党をモットーとし、その結果当然、公平で当たり障りのない、乾いた記述をすることが要求されるとしている。また、一方、英語の記事では、記者が署名をし、自分の見解をはっきりさせることが要求される、としている。これを本稿に応用すると、「朝日新聞」では、事実のみを公正に伝えるということが要求されるため、第 1 段落には、ある特定の内容を前面に押し出すことはせず、客観的に事実を羅列し、結果として、「記事全体の総論を与える」ことになっている、と考えられる。一方、“The Guardian” では、自分の見解をはっきり示すことが求められるため、第 1 段落には、記者自身の見解で、ある特定の内容のみを記述し、結果として、「主題を前面に押し出した」形になっている。また、「物語的な書き出し」や「比喩を用いた抽象的表現」を用いることで、記者自身の事実に対する見方を表しているともいえるだろう。

この論文では、日英の新聞記事のレトリックの違いを明らかにすることを最終目標に据え、「記事の第1段落の機能の違い」を明らかにした。もちろん、「記事の第1段落の機能の違い」だけで、両新聞記事のレトリックの全てが明らかになるわけではないが、その一端を映し出すことはできたと考える。

これからの課題としては、両記事の見出しを含む全体的な構成の違いについて詳しく見ていきたい。また、同内容の記事における、述べられる順序の違いについても考察していきたい。

注

- 1) 日英両記事の「見出し」自体の役割・機能に違いがある可能性があることは確かである。西原(1997)、Nishihara(1997)では、日英新聞社説の見出しを、1)見出しが完全な文をなしているか 2)見出しの内容が「描写・解說的」であるか、「意見表明的」であるかという観点から分類している。その結果、「朝日新聞」は文章による意見表明文が多く、これは読者に強いアピールを与え、一方、“New York Times”では描写・解說的な見出しが多く、これは「トピックを導入する機能」を果たしている、としている。本稿の日英新聞記事において、1)及び2)の観点から考察した結果、両記事とも、1)見出しは全て述語成分を含む完全な文からなり、2)見出しは全て、「描写・解說的」であり、両新聞記事の見出しの役割の違いを見いだすにはいたらなかった。また、ニュース記事という性質上、起こった出来事の中で、最も伝えたい内容が見出しに現れるという点については、両記事に共通であると考え、本稿では、「記事の見出し」を「記事の主題」の判断材料とした。「記事の見出し」の表現構造・役割の詳細については、今後の課題としたい。

参考文献

- 永野賢(1983)「談話における叙述の構造」『日本語教育指導参考書 談話の研究と教育1』pp. 63-89 大蔵省印刷局
- 西原鈴子(1997)「日英語新聞社説における談話構造」『日本語教育論文集-小出詞子先生退職記念-』pp. 537-548 凡人社
- (1998)「日・英語新聞社説における書き手・読み手関係一対照修辭論の一考察」『日本語教育論集14』国立国語研究所日本語教育センター
- メイナード・K・泉子(1997)『談話分析の可能性』くろしお出版
- Hinds, John(1983)“Contrastive rhetoric: Japanese and English.” *TEXT* 3, pp. 183-195
- (1987)“Reader versus writer responsibility: A new typology.”

- in Conner and Kaplan (Eds.), *Writing across languages: Analysis of L2 Text*, pp.141-152
- Kaplan, Robert B. (1966) "Cultural thought patterns in inter-cultural education." *Language Learning* 16, pp. 1-20
- Maynard, Senko (1996) "Presentation of one's view in Japanese newspaper columns: Commentary strategies and sequencing." *TEXT* 16, pp. 391-421
- Nishihara, Suzuko (1997) "Patterns of assertion and exposition in English and Japanese newspaper editorials." *Japanese Discourse* 2, pp. 25-41
- Nishihara, S and Shibahara, T (1998) "Rhetorical Contrast in Newspaper Reports: The Asahi Shinbun and International Herald Tribune"
『日本語コミュニケーション能力に関する国際共同研究』pp. 111 - 118
国立国語研究所日本語教育センター日本語教育指導普及部
(愛知国際学院)